

虹時計

田久保英夫





虹時計

田久保英夫

講談社

虹 時 計



定価 580円

1972年6月8日 第1刷発行

著 者 田久保英夫

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号 112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

振替 東京3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 有限会社文信社

Printed in Japan @Hideo Takubo 1972

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

0093-125761-2253(0) (文1)

目次

虹時計

5

静かな樹木

143

樹下再訪

197

あとがき

234

装
幀
—
司
修

田久保英夫作品集

虹

時

計

虹

時

計

耳のおくで、その小さな気泡の爆^はぜる音はたえまなく響いた。単調な、振子のような間合いで、近づき遠ざかり、いつまでも耳朶に纏いつく。じつと聴覚を澄ますと、その音に一条かすかな金属音がこもって、しだいに鋭くキーンと頭の芯を通りぬける。

恵介は部屋の薄暗いすみで、木箱の梱包をとく手をやめた。音の振幅が高まると膝の下で畳全体が小さく揺れる。彼にはその音が、家の裏手の河からくることがわかった。狭い河に機関船が何隻もダルマ船をひいてくると、エンジンの音が水中を通じて、岸の石壁にぶつかる。その力が家の床をかすかに振動させるほど強いと知ったのは、ここへ移ってきたばかりの半年前だ。機関の音がすぎてしまっても、耳の中の金

属音は銀線のように尾をひいている。まるで現実の機関音が消えるにつれ、自分の内部の音が残るようだ。幻覚だろうか。頭の奥の音だろうか。部屋の暗がりでじっと聞きたいと、その内側の音の方が確かで、外の物音もそれを生む世界も非現実のようである。空怖しくなった。

恵介は象牙の柄の小刀で、梱包の縄を乱暴に切った。象牙の硬い、手ずれのした重さが妙に安心させた。彼はその重い小刀で自分の怖れをふりはらうように、つぎつぎ縄を切った。それから、研ぎたての尖端だけ鈍く光る刃さきで、勢いよく箱のクラフト紙を削ぎはじめると、不意に遠くから若い女の声が聞えた。

——ええ、グラジオラスなんですの。グ、ラ、ジ、オ、ラ、ス。瓶へいれて、水栽培して。

一瞬、自分の内部の声かと思った。しかし、よく聞くと、それは階下の勝手口からひびく隣家の木塚という主婦の声のようだ。浩子のおさえた笑い声をする。隣の家とは同じ門のなかにあって、台所が低い板塀でむかい合っているの、女たちはよく窓や塀ごしに言葉を交す。

浩子の笑い声は喉にこもった響きだ。柔かく細くて、桃色の血管の浮いた気管を想わせる。ふだん喋る声も、幼稚っぽく歯ざれわるい。勤めの和裁の方では腕ききだというが、家事や私的な人づき合いでは、もどかしい時がある。彼は浩子の声に耳をす

まし、また手あらく箱の包装を剝いだ。何か悠長に喋っているが、自分は早くこれをすませて出かけなければならない。

小刀で木箱のフタをこじあける。山梨の母の実家からとりよせた、小さな紫檀の飾り棚だ。実家の叔父に送らせるのに、三ヵ月もかかった。彼は棚に疵がつかないように巻いてあるビニールをといた。三段に分解してあるのを組立てて、部屋の床の間にすえる。この床も壁も以前は汚れていたが、母がくればきつと厭がるので、左官まで呼んで整備した。母の加根がこの部屋に住めば、どんな掛軸をかけるか目に浮ぶようだ。紫檀の飾り棚には、長年身ぢかに離さない厨子ずしをおくだろう。それから、頭部にベルのついた旧型の目ざまし時計。古九谷の水瓶。三平のこけし人形……。

彼は棚板に軽く掌で触れながら、そう考えると、自分でも不思議に気持が高ぶった。母が今いる蔵前の大きな家、彼自身も生れた家から、自分の家へつれてくることは、もう何年来の執着だった。以前自分たちはアパートずまいで手狭だったが、やっとこの小さな二階家も手に入った。浩子との生活に、母を加えることはどこか家庭にしっかりと根が据わる気がする。

しかし恵介は、それがほとんど母のためより、もっと自己本位な意図だということを感じていた。むしろ、加根自身は今の家にいた方がいいかも知れない。けれども、自分はどうしてもそこから、母をつれ出したい。いや、その大きな薄暗い家から、ま

るで深い地下茎をひきぬくように加根をこっちへ呼ぶこと——家を宰領する父の謙三から、ひき離すことに、自分は兇暴なまでの衝動を感じるのだ。

彼は父を思い浮べると、そんな衝動が不可解につのった。むしろ、「父」と言えない存在——戦争中、自分が小学生の時、あの蔵前の家へ入ってきた母の配偶者。しかし、空襲で焼けた家屋も店もすっかり建てなおした父。肉は薄い、線条鋼のようにどんな筋肉労働にも耐えられそうな四肢や、柔和そうな顔を目に浮べると、血のつながりがないにも拘らず、濃密な血縁に似た重くるしさと嫌悪を感じてしまう。頑丈な生活人の肉体の感覚が、自分の皮膚によりそってきて、その足が機敏に家の廊下を、すっすっと歩く音を聞く気持さえする。

「ああ、重い重い。よいこらしよ。」

浩子が階段をあがってくる音がした。いつもこの女が部屋へ入る時、ふわっと白い影のように柔かい歩みなのに、今は階段上へ踏んばる足音といっしょに、大きな声が聞えた。敷居に硬いものがぶつかり、こっちの腰へ木杵が当たった。

「いやあね。ごめんなさい。」

みると、夏用の真新しい網戸を運んできたのだが、浩子の手にはカサばって始末に負えず、こちらの皮膚へ木杵が食いこむ。

「どうしたんだ。こんな戸を持ってきて。」

彼は両手で端をささえ、網戸を壁際へ立てかけた。母のために、新しい戸をとりよせたが、職人が敷きこむまでここへ運びあげたら邪魔になるばかりだ。

「あら、いけなかったの？」

「これから、この部屋は簞笥だの蒲団だの入るんだよ。」

「みんな今日するの？」 浩子はおっとりと室内を見廻して言うが、こんな忙しい時ほど、家事をすると遅くて不器用だ。しかし、三十になるくせにお河童風の髪で、乳色の皮膚は子供臭くて腹も立てる気にならない。

「俺は出かけるし、今日できるわけないさ。」 彼は階段の方へ歩いた。

「あとを片づけてくれ。」

「はいはい。」

浩子は畳に膝をついて、木箱へビニールや蓋の板切れを抛りこんだが、急に顔をあげ、

「庭にも、観葉樹の棚つけるんでしょう。どこまで準備するの？」

「どこまでって、お袋が一人ふえる生活範囲はきまつてるよ。」

「でも、いいの？ そんなに念入りにやって？」

「なぜだ。」 恵介は階下へおりかけて、階段の二三段目で立ちどまった。確かに念入りすぎると、自分でも漠然と思っていたことだ。それは考えてみれば、不安の現れ

ともいえる。念入りに支度しないと、母の加根がここへ来る気になれない。こっそり一応の承諾はえているが、周囲に知れたら、当然摩擦は多いはずだ。彼はその承諾をえた時の、母の窪んだ目を思い返した。たしか加根が「もうこの家も店も固まって、自分のつとめはすんだ。」と疲れたように漏らした時、じゃ今後は家へ来てのんびりして下さい、とすすめたのだ。本当に人間が必要かどうかは、いなくなってみないとわからない、と仄めかしたら、とうとう母は承知した。

「もしね。」浩子は言った。「せっかく支度して、お母さまが来なかったら？」

「来るよ、来るさ。」自分がせっかく部屋や家具を整えたり、準備を考えているのに、この浩子の言葉は腹が立った。そうでなくとも、不意に自分でも何のために、という疑念や不安に襲われることがある。

「でも、お父さまや真治さんや絹ちゃんが、厭だといったら。」

「誰が厭だというかと、本人の意志だよ。場合によったら、俺がこっそりつれて来ちゃう。」

「そんな。」

浩子は異様なほど真摯な目で、こっちを見た。彼はそんな女が鈍感なのか、ばか正直なのかわからない、と思った。

母を奪回する。彼はこんな言葉が口をついて出そうになり、大げさなので喉へ嚥み

こんだ。この気持——秘かな犯罪にも似た衝動は、自分自身にもはっきり理解できないのだから、浩子にわかりうると思えない。

「そうとも。これはなま易しいことじゃないんだ。」

恵介は足音をあらく立てて、階段を降りた。居間へくると、それでも外出の背広、Yシャツ、靴下類が揃えてあった。服を着換えながら、柱時計をみると、ほぼ一時だ。今日は雑誌の取材に廻ることになっていて、会社へは遅出^{おそで}だが、取材先の地裁の公判が二時。そのまえに、できれば蔵前の家へ廻ってみたいと思っている。

廊下ごしに襖が半ばあいて、奥の八畳の薄暗い畳に浩子が脱ぎすてた着物がみえる。週に二度、午前中都心の和裁スクールへ教えにいくほか、服飾の大きな専門店の着つけや配色のデザインをやっていて、外へ出がちだ。四年前まで、蔵前の家の近くの呉服店にいて、母や妹の着物の仕立てもしたが、今はもう自分ではほとんど縫わない。そのくせ収入は彼より多いくらいだ。

恵介は八畳の窓べや壁、衣裳箆や鏡台などに、何枚も長いサラシ友禅のように、染色見本の反物が垂れているのに目をやった。浩子が家で仕事をする時、その絵柄や色見本をいくつもかけ替えるが、近頃ではふだんでも片づけけない。彼は二三歩部屋へ踏み入れて、窓の光が葡萄色や朱色の絹を透き、幾条^{すじ}も彩る猥雑な空間を眺めた。まるで女臭い彩りの偏光にみちた密室のようだ。女の頭脳の内部は、浩子でも母の加根

でもこんな奇怪な光景をしているのだろうか。とすれば、男の自分などとうてい理解できそうな世界ではない。

彼は襖をすっかりあげ、廊下からの外光を入れた。足もとに、浩子が脱いだ象牙色の紬、白い長襦袢、金茶の帯、紅い扱帯などが散乱している。コハゼの光る白足袋が、薄汚れた裏をみせている。彼は白い絹の襦袢が人の軀をすっぽり抜いたような形で、崩れ、皺だっているのに、むしろなまなましい肉軀を感じた。裾が畳へ扇のように開いて、帯の束と重なって高くなるにつれ、絹目が微粒の光をけば立つように反射している。それは浩子の白い脆そうな肩や胸の皮膚そっくりだ。

彼は不意に子供の頃、父の謙三がよくこんな女物の衣類を、足で隅の方へ片よせたのを思い出した。すると、自分でも思いがけない衝動で、畳の着物や帯の人型ひとがたを足で二度三度と蹴り、つき崩した。彼はその動作にどこか官能的な快さを感じると、自分が父と同じ行為をしたのが恥かしく、不快になった。

この気持はかみ殺そうとしても、長く尾をひいた。自分は早くから、謙三のいる家を離れようとばかりつとめたが、今の反射的な行為は、まるで自分の日常見えない足の裏だけ、父と似通っているような意識をよび起した。彼はいつも自分のなかに、こんな父への意識が深く潜んでいるのを今感じた。それは長い間、自分を分厚い水藻のようにとりまき、押えつけている。そのことにしだいに気づき、たえがたくなってい